

幕末の会津（福島県）で集団自刃した白虎隊の逸話は広く世に知られる。中でひとり生き残り、電信技術者として文明開化に尽力した隊士がいた。飯沼貞吉（のち貞雄）私の祖父である。

朝廷に至誠を誓う会津藩は薩摩藩、長州藩を中核とする官軍から幕府につく仇敵とみなされ、討伐の憂き目に遭う。慶応4年（1868年）3月、会津で組織されたのが16、17歳の少年から成る白虎隊だ。

15歳だった貞吉は年齢を偽り、これに志願。官軍

は8月に会津若松に侵攻、白虎隊士中二番隊のうち16人が同月23日、飯盛山で自刃した。白虎隊は忠君愛國の鑑といわれるが、飯沼家では話題にすることさえ禁忌とされた。

朝敵呼ばわりへの抗議
同じ技術者の道に進



飯沼貞吉の肖像画

声が夢の中で聞こえた。何をよくよしてゐるんだ、会社がつぶれても命はなくなるまい。ならぬことはならぬ」と命をなげうった白虎隊に比べれば何ほどかと乗り切った。貞吉の人生を真剣に追跡し始めたのは7年

されていた。落城と誤認して自刃したというお涙ちょうだいの通説にかなて疑いを抱いていたが、やはり白虎

ちない、入城を目指すべきた。「甲怒り、乙罵り、激論以てこれ争う」隊長代行の篠田儀三郎が議論をまとめた。もうこの人数では突入も入城も難しい。敵の縄にかか

て切っ先をのどの奥まで押しこんだ。会津の貞吉の母へ密書人事不省に陥った貞吉は通りがかった女性に炭

孫の姉にあたる女性から「貞吉を預かっている」という本を自費出版したの

白虎隊生き残りの貞実

飯沼 一元



焼き小屋に運ばれ、一命をとりとめたが、これがのちの汚名につながる。私は祖父が晩年をすごした仙台の家で生まれた

孫の姉にあたる女性から「貞吉を預かっている」という本を自費出版したの

死んだ藩士の思いを胸に新時代を生きぬいた思いは、いかばかりだったろうか。（いいぬま・かずもと）ライステック社（長）